

サイレンススズカ生存  
ルート～もし彼が生  
ていたなら～

ディア

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

サイレンススズカ。現在でもなお悲劇の名馬として知られる彼が予後不良の診断をされたにもかかわらず安楽死の処置を受けず生きることを選んだら…？

そんなifルートのお話。

この小説は小説になろうの方にも投稿しています。

# 目次

サイレンススズカの説明回	1
99～01春までの現状	7
サイレンススズカ、動き出す	16
サイレンススズカの復活！	22
外伝 マーチオブスズカ	30
外伝 サイレンスプリンス	42



# サイレンススズカの説明回

西暦1998年11月1日天皇賞秋、年間無敗だったサイレンススズカに馬生の幕が下ろした。

【サイレンススズカに故障発生！沈黙の日曜日!!】

それは実況アウンサーが放った言葉だった。父サンデーサイレンスの名前を直訳すると沈黙の日曜日……まさしくサイレンススズカはそれを実行してしまった。

この時の勝者は皮肉にもワキアに当初つけようとした種……トニービンTBの産駒のオフサイドトラップであり、ナリタブライアンの同期の馬だった。二着にはサイレンススズカと同じSサンデーサイレンスS産駒のステイゴールド。2番人気のメジロブライトはサイレンススズカを避けるのに必死で5着に沈んだ。

そして啞然としている競馬ファンに悲報が届く。

【サイレンススズカ複雑骨折により予後不良の診断が下されました。】

競走馬は繊細な生き物である。それこそ複雑骨折などすればその足が壊死して長く苦しむことになる。予後不良とは安楽死させるしかない状況下のことをいうのだ……そう、サイレンススズカの姿を二度と見ることはないのだ。

その後、ステイゴールドは競馬ファンの誰もが想像しないような大種牡馬となり、成功する。

サイレンススズカ騎乗の田根豊は悲しみや苦しみを乗り越え、次年度のスペシャルウィークでその仇をとり、ディープリンパクトも三冠馬にして見せた。

しかしだ。もし、サイレンススズカが予後不良ではなく生存していたならばどうなっていただろうか。

そんな『たられば』の物語である。

時は遡り、1998年11月1日天皇賞秋サイレンススズカは故障を発生し、重度の骨折をしていた。それこそ予後不良と診断されるほどに。

「スズカ……」

田根豊はそれを聞いて涙を流していた。彼にとってサイレンススズカは特別な存在なのだ。それこそ最初のGI勝利に導いてくれたスパークリーク、最強ステイヤーマジロマックイーン、ダンスインザダーク、エアグルーヴ、そして田根豊をダービージョッキーにしたスペシャルウィークよりもだ。

だがサイレンススズカに田根豊が最初に騎乗していたわけではない。田根豊がサイレンススズカと初めて出会ったのは新馬戦の時にライバルの馬の騎手として出会ったのが始まりだ。新馬戦の勝者は田根豊ではなくサイレンススズカだった。その時の圧

倒的な能力は田根豊に「スズカにクラシック持つて行かれるな」と言わしめ、サイレンススズカは一戦交えた後トリアル弥生賞へと進んだ。

その弥生賞でまさかの珍事件が発生した。サイレンススズカは発走前にゲートをくぐってしまうということをやらかした。サイレンススズカはSS産駒であり、その産駒の特徴は気性が荒い。当然ながら逃げ馬に不利な外枠からのスタートとなってしまう。さらにスタートで10馬身も出遅れ、もはや大惨敗は免れない……かに思われたが4コーナーで3番手まで追走していたことでその実力を示した。

その後、ダービートリアルであるプリンシパルステークスに勝利したものの本番日本ダービーでは同じ逃げ馬であり皐月賞馬サニーブライアンにまんまと逃げ切られてしまい敗北、しかも菊花賞トリアルの神戸新聞杯で新馬戦以来の付き合いであるジョッキーク守村が騎乗ミスして降板させられてしまう。

神戸新聞杯で敗北し、気性難や血統などの問題で天皇賞秋に出走することになったサイレンススズカ。その騎乗を務めたのはベテランの川内浩史……後のダービー馬アグネスフライトの主戦騎手である。もちろんベテランということもあり、騎乗ミスをすることはなかった。しかし超がつくほどハイペースで逃げたこともありエアグルーヴの6着に沈んだ。だが3着のジェニユインとは0.1秒差しかなかったことから大逃げ戦法を確立させたレースだった。

そんなサイレンススズカに香港国際カップの招待状が届き、陣営はそれに登録。その過程でマイルCSに出走したがかなりキツイローテや調整不足の影響でイレ込み、同じ逃げ馬キョウエイマーチに潰されてタイキシヤトルの15着と大惨敗。原因はドタバタすぎた。この一言に尽きる。

そしてそれを見かねた田根豊は「依頼が来るまで待つのが騎手」という暗黙の了解を乗り越え、自らサイレンススズカに騎乗することを申し出た。

そして香港国際カップ。そのレースでサイレンススズカの大逃げに誰もがついていけず、その速さから *wikipedia* にも1600m通過タイムが同日の香港国際マイル（この時香港国際マイルは1400mの香港国際ポウルというレースで1600m走れるわけもない）よりも速いと言われる始末である。そんな大逃げを繰り出したにもかかわらずサイレンススズカは勝ち馬から僅差の5着となった。

翌年サイレンススズカはオープン特別バレンタインステークス、中山記念、小倉大賞典と三連勝、重賞二連勝のまま勝ち進んでいった。

そして金鯱賞にはサイレンススズカを神戸新聞杯で負かした菊花賞馬、マチカネフクキタルをはじめとした重賞を含めた連勝馬が集まった。しかしそんなことは田根豊騎乗のサイレンススズカには関係ない。サイレンススズカは小倉大賞典で息を整えることを学び、最初大逃げして直線で一気に突き放すというレーススタイルを完成させた。



その結果サイレンススズカはその馬達を相手に大差勝ちを収めた。

春のグランプリ宝塚記念はエアグルーヴに田根豊が騎乗することもあり、一旦別れ、代わりにサイレンススズカに三冠ジョッキー南位が騎乗し1000m通過タイムが58秒とサイレンススズカにしては慎重なレース運びをしてGI馬となった。

そして休養明けに毎日王冠に出走することになったサイレンススズカだがその首を狙ってた二頭の外国産馬がいた。エルコンドルパサーとグラスワンダーである。この二頭は互いに無敗のGI馬であり、素質も高く評価されていた。エルコンドルパサーは今でこそ2400mが適正距離とされているがマル外ダービーといわれるNHKマイルCを勝ちその実力を発揮していた。グラスワンダーに至ってはあのマルゼンスキーの再来と言われるほどでエルコンドルパサーよりも評価が高かった。そんな二頭を相手にサイレンススズカは59kgという斤量であるにもかかわらず、いつもどおりの大逃げをした。

通常ならば自爆してもおかしくないほどのハイペースであり、エルコンドルパサーはいつもどおりの競馬をすれば勝てる……そう信じていつもどおりの横綱競馬をした。一方グラスワンダーはサイレンススズカがそんな甘いわけがないと思い、早めに仕掛けで先頭に立ち競り合いに持ち込ませる戦法に出た。

どちらも間違いだった。サイレンススズカに勝つには追い込み馬以上の末脚とマイ

ル戦のスピードとそれを維持するスタミナが必要だ。結果、エルコンドルパサーは二着、グラスワンダーは早めに勝負したことが災いし5着と敗れた。

そして二度目の天皇賞秋……去年の覇者エアグルーヴは不在。よって一番の相棒田根豊も騎乗出来、いつもどおりの大逃げ戦法が出来る。またここに出走するGI馬、メジロブライト、シルクジャスティス等とは決着がついており、4番人気であり唯一この年サイレンススズカの影を踏んだ(3/4馬身差)ステイゴールドも重賞を勝っていない。もはや不安要素はなかった。

だがご存知の通り、サイレンススズカは故障し、予後不良の診断を下された……ここまでは史実どおりだ。

だがどういふことか馬主であるオーナーは獣医師から勧められた安楽死を了承するのを拒否した。

それはサクラローレルが予後不良と診断されたにもかかわらず生き延びたようにサイレンススズカも生き延びてほしいというファンの願いがあり、馬主も同じ思いでそれを叶えようとしていた。

サイレンススズカの闘病生活がこうして始まった。

# 99〜01春までの現状

1999年

サイレンススズカは現在ブランコ状のハンモックに吊るされていた。

サイレンススズカは左前脚を複雑骨折しているためそこに負担をかけるわけにはいかない。手術後の痛みもあつてかそれはしないがサイレンススズカは左回りにぐるぐると回る旋回癖を持っている。それをしなければストレスが溜まってしまふ……前にタイヤを吊るしてその旋回癖を止めようとしたが返って膨大なストレスが溜まってしまったのでそれを直す手段は諦めた。

しかし今のサイレンススズカはそれは無理だ。現在ストレスを解消するには左前脚を使わずとも延々と回り続けられるようにしなければならぬ。だが普通左回りに回するには必ず左前脚は必要になる。

となればブランコ状のハンモックに吊るして左前脚を使わずとも回るようにすればいい。ブランコ状のハンモックならば左に回ろうとすれば右脚の方に体重をかけるだけで済む。何度も試し、ついにサイレンススズカの理想のハンモックが出来上がった。

ブラブラとサイレンススズカがハビリという名前の旋回をしている頃、4歳クラ

シツクはというとテイエムオペラオー、アドマイヤベガ、ナリタトツプロードの三強がそれぞれクラシツクタイトル、皐月賞、日本ダービー、菊花賞の三つのタイトルを奪い合っていた。その内アドマイヤベガはサイレンススズカと同厩同父同主戦騎手であり、サイレンススズカの後輩にあたる馬だ。特に騎乗が田根豊ということもありサイレンススズカとアドマイヤベガを比べるといったこともある。

古馬勢の方は前年サイレンススズカがボコしたエルコンドルパサーはヨーロッパのGIを勝っただけでなく凱旋門賞二着と大健闘をしていた。これまで日本……否アジア勢が凱旋門賞に挑戦した馬で歴代最高の順位となった。

日本ではサイレンススズカと同じ産駒であり同じ主戦騎手のスペシャルウィークが天皇賞春秋連覇達成の上に当時連対率100%の凱旋門賞馬モンジュウ等を打ち負かしてJCのタイトルを獲得。グラスワンダーはそのスペシャルウィークを宝塚記念、有馬記念と何度も負かしていた。

その結果から『98年代最強馬は誰だ!』という論争が必ず起こる。エルコンドルパサーは去年のJCでスペシャルウィークを打ち負かし、グラスワンダーはグランプリで三回も打ち負かした。しかしスペシャルウィークはこの中で最も賞金を稼いでおり、二冠馬セイウンスカイもエルコンドルパサーをボコしたモンジュウもボロボロにしてやった。

その醜い代理戦争をわかりやすく台本形式風で見よう

エル厨「エルはスぺにもグラにも先着した！　そして凱旋門賞でもアジア勢最高順位！　だから最強!!」

グラ厨「何言つてやがる！　グランプリレースにも出れねえ、勝てねえような奴に言われたくねえ！　それにグラに先着した時だつてスズに負けたことに変わりない！

その点グランプリ3連覇の偉業を成し遂げたグラ最強!」

スぺ厨「エルは古馬になってからスぺとの対戦避けただけだし、それにグラは左回りができない右回り専用のポンコツだろ？　賞金ならスぺが一番だから最強!」

とまあこのようにサイレンススズカを巻き込み醜い代理戦争がどこでも行われている。ちなみにネタバレになるがその一世代下の馬も巻き込むことになるが割愛させてもらう。

### 閑話休題

さて話は大きく変わる。『サイレンススズカはアドマイヤベガと同厩』と書いてある通り、サイレンススズカは現役を引退していない。

本来なら引退させてさつさと種牡馬入りさせるところなのだが当の本人ならぬ本馬サイレンススズカがそれを拒否。種牡馬入りするために馬運車を用意したが馬房から離れず、無理やり入れようとしても同期のシルバーコレクターのように嘸み付く有様。

馬は年老いてから気性が荒くなる傾向があり、メジロマックイーンもその例に当てはまる。サイレンススズカもその例に漏れなかった。シルバーコレクターは元々だが。

そんな訳で現役続行したサイレンススズカは左前脚を使わず、トコトコと器用に馬房の中を歩いていた。狭い馬房の中でブランコ状のハンモックがサイレンススズカの動きを時折邪魔をするが痛みに比べれば大したものではない。

痛みのストレスは想像を絶するものだ。無敗の三冠馬シンボリルドルフと似た配合（父、パーソロン、母、スリードシンボリ）のマテイリアルは1989年の京成杯オータムハンデキャップで故障し、予後不良となりかけたがオーナーの意向で手術をして成功し生き延びた。しかし術後の痛みから来るストレスにより潰瘍性大腸炎を発症し、下血し、その後回復する見込みがなく安楽死を措置をとらざるを得なかった（その前にマテイリアルは出血性ショックで死亡）。

しかしサイレンススズカは痛みに対するストレスを旋回することで解消し、手術とハンモックでこの年を乗り越えた。

（翌年）

2000年

20世紀最後の年となった世紀末。サイレンススズカの治療は奇跡的とも言えるほど順調だが春の時点では走るには程遠く、キャンター（駆け足運動）も引き運動もまだ

まだ出来なかった。しかし馬房では左前脚を庇いながらもクルクルと旋回していた。

その頃のクラシック路線は田根豊騎乗のエアシヤカールが皐月賞を制し、二冠目に挑む日本ダービー。田根豊は三年連続日本ダービー制覇という偉業へと向けて気合を入っていた。

しかし田根豊はスペシャルウィークの日本ダービー制覇までは呪われているんじゃないかと言われるほど素質馬に恵まれても日本ダービーを勝てずにいた。

一番有名な例がダンスインザダークだ。ダンスインザダークは弥生賞を制したものの皐月賞は発熱により不出走。だが新馬戦で繰り出した圧倒的な末脚や全姉ダンスパートナーの良血から素質を買われ、SS四天王（他には皐月賞馬イシノサンデー、朝日杯3歳S馬バブルガムフェロー、ダービー馬ウイニングチケットの半弟ロイヤルタツチ）の筆頭と言われていた。しかも騎手二年目からGI勝利（88年菊花賞）を挙げた若き天才田根豊が騎乗する……もはや不安要素などなかった。結果は早仕掛けが災いしたのとフサイチコンコルドの強襲等の不確定要素に足元を掬われ、ダンスインザダークは2着と敗れた。

その後スペシャルウィークに騎乗し、勝利すると今までの呪われぶりが嘘のようにアドマイヤバガで連覇達成。

そして前代未聞の三年連続日本ダービー制覇に気合が入らざるを得なかった。

だが京都新聞杯からやってきた良血馬アグネスフライト。かつてサイレンススズカに騎乗したベテラン川内がペアを組み、エアシヤカールに立ち向かった。

【豊の意地か!?川内の夢か!?どっちだー?!?】

史上最高クラスのデッドヒートとなった日本ダービー。アグネスフライトが鼻差7cmという差でエアシヤカールを抑えて勝利した。その後エアシヤカールは菊花賞を勝ち三冠馬に最も近い二冠馬と呼ばれるようになったがアグネスフライトはそれを阻止して正解だったと競馬ファンに言われるようになったがその理由も割愛させてもらう。

古馬の中長距離GI路線の方はスペシャルウィークが引退し、アドマイヤベガも故障によりサイレンススズカを差し置いて引退。

残った主なメンバーと言えば最強世代の一角でグランプリ4連覇を狙うグラスワンダー、去年の皐月賞馬でありながらダービーと有馬を3着、菊花賞2着と善戦マンの印象を隠せないティエムオペラオー、去年クラシックの内ティエムオペラオーに二回以上も先着した菊花賞馬ナリタトップロード、サイレンススズカの半弟ラスカルスズカ、おまけに去年一昨年と連続で天皇賞秋二着になったシルバーコレクターことステイゴールド。そのメンバーが古馬中長距離路線の中心となり、波乱とされていた。

しかしこのうちある一頭の馬が、古馬になったサイレンススズカの如く覚醒してい



た。テイエムオペラオーだ。彼は天皇賞春でラスカルズカ、ナリタトップロード等を打ち負かし、宝塚記念でも同じくグラスワンダーを負かし……天皇賞秋。サイレンススズカですら破ることもできなかった。「一番人気の馬は勝てない」というジンクスがテイエムオペラオーの前に立ち塞がるが関係ないと言わんばかりに勝ってしまった。

テイエムオペラオーが完全に無敵となったJC。このレースにはエアシャカールとアグネスフライトが出走していた。準三冠馬とダービー馬が無敵の古馬チャンピオン相手にどれだけやれるか……競馬ファンは見物だったが、エアシャカールもアグネスフライトも2桁順位で散々な結果だった。一方のオペラオーはこの年の2カ国年度代表馬ファンタスティックライトやメイショウドトウを退け優勝。天皇賞秋よりも長く続いていた1番人気不勝利ジンクスを破った。そして信長包囲網よりも過酷なマークをされた有馬記念も優勝。グランドスラムと呼ばれる快挙を成し遂げた。

話が長くなったがサイレンススズカの方はテンポイントという名馬が遺した治療法が効果を発揮し、冬頃には骨がうまくくっついて引き運動を行っていた。

「来年の秋天、頑張ろうな。スズカ」

来年の天皇賞秋はどうなるかわからない。しかし間違いなくグランドスラムを達成し、史上三頭目の満票での年度代表馬となったオペラオー、宝塚記念から2着続きのドトウ、菊花賞馬トップロードが古馬中長距離路線の中心に立つのは違いなかった。更に

来年からマル外がクラシックに出られるようになり、4歳勢からも強敵がやってくるだろう。

そんな最中でもスズカは勝てるのか？と言われれば無理だろう。何しろトウカイテイオーですら一年ぶりに本番ぶっつけの有馬記念に出走して勝ったのが奇跡とも言えるくらいだ。しかもスズカはすでに数え年で7歳であり、人間年齢に換算するとおっさんとも言える年齢だ。それだけ頑張ったのだからもう引退しても誰も文句は言わない。むしろ何故引退しなかったのか文句を言われるくらいだ。

実際、競馬ファンからはオーナー宛に「スズズを引退して休ませろ！」などの手紙が届き、中には「引退させなければお前を殺して俺も死ぬ」など脅迫文も届いていた。しかしその一方で「スズズの走る姿をもう一度見てみたい！」や「病気から早く逃げてくれ！」という声もあり、千羽鶴が届けられたのもあった。

スズカの目を見ると引退した馬のような黒ろずんだ目ではない。現役、それも超一流の馬がタイトルを獲得しようとする時の光り輝いている目だ。まだまだサイレンススズカは引退出来ない。

そして21世紀初年度……まさかの事態発生した。サイレンススズカ達が年を取っていないという事態が発生していた。

これは年齢表記を日本で使われていた数え年表記から国際標準の満年齢表記に変

わつたのだ。これにより最優秀3歳牝馬を二回受賞する例もあった。

とにかく何事も問題なく、サイレンススズカは21世紀の初年度春。すでにキャンター運動をこなしていた。この調子であれば秋までとは言わず、夏の終わり頃には出走も夢ではない。

駆け足とはいえサイレンススズカの走る姿を見た田根豊を始めとしたサイレンススズカに騎乗した騎手達は安心7割、その他の感情3割と複雑な気持ちだった。

なおこの年は98年世代にも勝るとも劣らない程豪華なメンツが揃っている。ラジオたんば杯で3着だったもののそれまでのレースレコードタイムよりも早くゴールした芦毛の外国産馬クロフネ、そのラジオたんば杯でクロフネに先着した<sup>トニービン</sup>T B産駒のジャングルポケット。そしてその勝者であり無敗のまま弥生賞も制した<sup>サンデーサイレンス</sup>S S産駒の超良血馬アグネスタキオン。

その他にも後にフジキセキを差し置いて父サンデーサイレンス役を演じることになる俳優マンハッタンカフェもこの世代の馬である。

古馬に加え、3歳勢も強力でサイレンススズカが復活したとしても勝てるかどうかはわからない。だがこれだけは確実に言える。

為せば成る為さねば成らぬ何事も。

## サイレンススズカ、動き出す

サイレンススズカは奇跡的にも骨がくつつき、馬なりの調教も始まっていた。

その頃の3歳春クラシックは大本命である無敗の皐月賞馬アグネスタキオンが屈腱炎により引退。日本ダービーはジャングルポケット本命とクロフネ対抗と人気を集めていたが皐月賞2着のダンツフレーム、青葉賞を逃げ切った外国産馬ルゼルも馬券圏内の評価だった。

「やはり皐月賞2着馬と3着馬の対決になった！ ジャングルポケット抜けた！ ゴーリン！ マル外解放元年のダービーを制したのはジャングルポケット！ 2着はダンツフレーム！ クロフネは5着！」

結果はジャングルポケットが勝利。二着にはダンツフレーム、外国産馬はクロフネの掲示板がやつとという有様で散々な結果に終わった。

（8月）

「15—15も出来るようになったか……」

サイレンススズカの調子は徐々に戻り、15—15という調教を行っていた。15—15とは1F（約200m）あたり15秒間隔で走る調教であり最も効率的な調教とも

言われている。

「(この調子なら毎日王冠に出走出来るな……いや秋天で骨折したのはこの毎日王冠が原因かもしれない)」

毎日王冠に出走出来る可能性も芽生えてきたが首を振ってその考えをなくす。確かに毎日王冠はサイレンススズカの得意な左回りの東京競馬場であり、1800mと距離も適正距離内である。実際にエルコンドルパサーやグラスワンダーも凌いでいるのが何よりの証拠である。

だがどうしても天皇賞秋で骨折した原因はこの毎日王冠にあるのでは？ という考えがよぎる。天皇賞秋は毎日王冠のレースから一ヶ月満たない内に始まる。旧4歳の時、サイレンススズカは日本ダービーとマイルCS。どちらも一ヶ月経過しない内にレースを行った結果惨敗している。しかしそれ以外は約一ヶ月以上間が空いているのだ。その状態で走るとサイレンススズカは本領を發揮し、強くなる。負けてなお強しの弥生賞や天皇賞秋(初回)、香港カップなどの例がそうといえる。

「(札幌記念は現状無理、だからといって京都大賞典は右回りの上に距離も長い……それに毎日王冠と同じ週だ。論外だ。)」

どう考えても札幌記念には間に合わない。出走するとしたらシンザンのようにそのレースを調教と見なしてレースするしかない。しかし京都大賞典は毎日王冠と同じ週

で行われる上にこちらの方が600mも長くサイレンスズカの不得意（とは言い切れないが）の右回りである。その上京都大賞典には去年の年度代表馬テイエムオペラオーを始め、オペラオーに二度先着したナリタトップロード、そして世界のステイゴールド等も出てくる為実質GIと大差ない。

「……オールカマーだな」

消去法で考えるとこのレースしかなかった。オールカマーは9月に行われ、距離もサイレンスズカが制した宝塚記念の距離と同じく2200mとサイレンスズカの適正距離内である。

しかしオールカマーは京都大賞典と同じく右回りで行われる上に中山競馬場で行われる。中山競馬場の特徴は心臓破りの坂と呼ばれる坂がありそれを登るにはその距離のレースよりも長い距離を走り切れるスタミナとパワーが必要だ。一度中山記念で中山競馬場を制したがその時は距離も1800mと短く、オールカマーのような2200mではない。

しかしオールカマー以外の選択肢はダートしかない。サイレンスズカの特徴は生まれ持った絶対的なスピードだ。ダートではそれが打ち消されてしまう。確かにパワーもあり、走れないこともないがわざわざサイレンスズカの特徴を殺してまで出走するほどではないのだ。

（9月）

中山競馬場にてオールカマーが行われていた。

「サイレンススズカまだ余裕のリードを取って直線に入った！」

サイレンススズカがオールカマーに登録すると聞いてやってきた客は多く、この会場は熱気に包まっていた。

「しかしエアスマップがそれを捉える勢いだ！サイレンススズカは一杯になった！」

だがその歓声も悲鳴に変わった。サイレンススズカが差し切られてしまったのだ。

「エアスマップが差し切った!! ゴールイン！ 2着にゲイリートマホーク！ サイレンススズカは3着争いがやつとというところ。勝ちタイムは2：13.9」

サイレンススズカは終わった。誰もがこのレースをみてそう思った。あのエルコンドルパサーやグラスワンダーを寄せ付けない強さを持ったサイレンススズカはもうどこにもいない。そこにいたのは老いた麒麟だった。

「キツかったか？」

厩務員がそうサイレンススズカに声をかける……するとサイレンススズカは涙を流していた。

「次、頑張ろうな。スズズ」

厩務員の言葉を聞いたサイレンススズカはどこか哀愁を感じた。

（10月）

ダービー馬ジャングルポケットは札幌記念（3着）の後菊花賞へと歩み、ダービー2着のダンツフレームは神戸新聞杯（4着）から菊花賞へと歩んだ。

新たな有力馬としてジャングルポケットやダンツフレーム等の有力馬多数を破ったエアエミネム、サイレンスズカを破ったエアスマップの半弟マンハッタンカフェも注目されていた。

そんな中、クロフネはNHKマイルCを勝つていながらもダービーで掲示板がやつとということから菊花賞を走れるスタミナがあるとは思えない。そこで天皇賞秋に向けて調教していた。

この年の天皇賞秋に外国産馬は獲得賞金の順に二頭出られるようになっていた。1頭目は去年からの因縁であるテイエムオペラオーを破って宝塚記念を制したメイショウドトウに決まっていた。

そしてもう一頭目の枠に入るべくクロフネがエントリーしていたがまさかの出来事が起きた。

エアシャカール世代の外国産馬、アグネスデジタルが登録してきたのだ。アグネスデジタルは3歳でGIを勝っており実力もあるがそれはマイル戦やダートでの話だ。芝の2000mならばラジオたんぱ杯で3番目に早いタイムでゴールしたクロフネの方



が世間の評価は上である。しかし世間の評価がどうあれクロフネよりもアグネスデジタルの方が獲得賞金額が多く、もう一頭の出走馬はアグネスデジタルに決まった。もちろん「マイルのダート馬がクロフネのチャンスを潰した」などとボロクソに批判されたのは言うまでもない。

## サイレンススズカの復活!

アグネスデジタルによって出られなくなったクロフネの騎手、田根豊は今度の天皇賞秋、サイレンススズカに騎乗することになった。(田根豊はこの年海外に騎乗拠点を置いていた為にクロフネ等、一部の馬しか乗れない。去年の二冠馬エアシャカールすらもこの年は田根豊ではなく海老名大吉が騎乗していた)

そんなサイレンススズカに騎乗する田根豊はある事を宣言した。

「今回はハナに立ってスローペースで逃げ切りを狙う」

……何を言っているのかわからない。それが最初に全員が思ったことだ。スローペースでの逃げ切りは誰もが警戒する。それをわざわざ言うのはただの馬鹿である。97年の日本ダービーを逃げ切ったサニーブライアン陣営ですら「例えサイレンススズカが逃げようとしても関係なしに逃げる」と宣言していたくらいである。

しかしサイレンススズカは今、老いぼれたとは言え、かつては自慢のスピードとそれを持続させるスタミナを生かし、超がつくほどハイペースで逃げ切る、といったレーススタイルの持ち主だった。サイレンススズカが二回目に出走した天皇賞秋も田根豊は「超ハイペースで逃げるのか?」と聞かれたときに「普通のペースで逃げますよ。もつと

もサイレンススズカにとつてですが」と宣言しており余裕の態度を見せていた。

今回はその逆、つまり「サイレンススズカにとつてのスローペース（1000m通過タイム58秒台）で逃げ切りを狙う」と言っているのでは？と思ってしまうのは当然のことだった。

故に今度の天皇賞に出走するサイレンススズカと同じ逃げ馬、サイレントハンター陣営が注目された。その理由の一つとしてはサイレントハンターはサイレンススズカのようなハイペースについていくことは無理だがサイレントハンターとの差を見ればスローペースかハイペースかわかる。サイレントハンターとの差が小さければサイレンススズカは本当にスローペースで走っていることになり、現役最強馬テイテムオペラオーのマークを諦めて早仕掛け、いや下手したらサイレンススズカよりも前で走ることになる。

相手はかつて史上最強馬とも呼び声が高かったサイレンススズカだ。今でこそエアスマップに負けてしまうような馬だがそれでも本当にスローペースで走ってしまったら幻の三冠馬と言われたアグネスタキオンや去年の有馬記念時のオペラオーですらも捉えることは難しくなる。

そして時が流れ……菊花賞は夏の上がり馬マンハッタンカフェ（クロフネ、ダンツフレーム、ジャングルポケット等を前哨戦で破ったエアエミネムは3着）が勝利し、天皇

賞秋当日。直線の馬場は荒れまくっており、大外以外は走り辛い状態だった。

そんな中、サイレンススズカは8番人気と評価は微妙だった。その理由は前走オールカマーで3着という微妙な順位であるのと数年振りの出走だったからだ。サイレンススズカが復活したという声もあればもう終わったという声もあり、かなり微妙な人気があった。それでも8番人気に食い込めたのはサイレンススズカがこのレースに出られたことに対する応援馬券のおかげである。

「さあ、21世紀最初の秋の古馬中距離GI天皇賞秋。スタート！」

サイレンススズカの三度目の正直、天皇賞秋がスタートした。

一度目は後にフライト・タキオン兄弟の相棒になる川内を背にしたがエアグルーヴやバブルガムフェローの一騎打ちの影に隠れてしまい6着。

二度目はサイレンススズカの為のレースとまで言われ、誰もがサイレンススズカが勝つと思っていた。しかしサイレンススズカは骨折し、その期待を裏切ってしまった。

今度はそうはいかない。サイレンススズカはイレ込みもせずこれ以上ないスタートを切った。

そんな最中、一人の騎手がサイレンススズカを見ていた。錦隆一。テイエムオペラオーの主戦騎手及び騎乗騎手である。

テイエムオペラオーに騎乗している錦はまだまだ新人とも言え、ダービーや菊花賞の

ようにオペラオーを足を引つ張ることも多くあった。

錦ではなく岡辺や田根豊などのトップジョッキーが乗っていたら無敗で旧4歳五冠（皐月賞、東京優駿、菊花賞に加え、JC、有馬記念を加えたGIレース）を勝ち、その上今年になってからも無敗記録の伸ばし続けただろうとも言われている。

しかしオペラオーとて馬である。ガソリンが血の代わりに流れているような馬でもなければ、ハンガリーの英雄でもない。この年のオペラオーに衰えが見えていた。

それでもオペラオーが今年の春の天皇賞を勝てたのは錦が導いていたからだ。確かに他の騎手であれば無敗で三冠馬になるという偉業を達成させられたかもしれない。しかしこの年のオペラオーを導びても錦と同じ結果になっていただろう。それだけ錦が成長していたのだ。

そんな錦がマークしたのはサイレンススズカだった。サイレンススズカはかつての栄光に縋る馬のようにも見えなくなかった。しかし同じSS産駒のサイレントハンターやステイゴールドはGIこそ勝っていないが重賞を勝ち、GIの舞台でも長く活躍し続けていた。サイレンススズカもその例に漏れないのでは？ と考えていた。

しかしオペラオーは去年、8戦8勝、年間無敗のグランドスラムを達成した馬であり現役最強馬でもある為に逆に周りからマークされてしまう。その上サイレンススズカの脚質は大逃げでありオペラオーは逃げ・先行よりも差し・追い込みよりの脚質である。

故にサイレンススズカをマークしようにも出来なかった。

そんな中、(アグネス)デジタルは最後方でオペラオーをマークしていたがメイショウトドウ等の他の馬のように徹底的にマークしていたわけでない。サイレンススズカの様子を見ながらオペラオーをマークしていたのだ。

もしサイレンススズカが本当にスローペースで逃げていたとしたらオペラオーに瞬発力で勝負するしかない。しかしオペラオーの瞬発力は半端なものではない。臯月賞と有馬記念。どちらも中山競馬場ではあるがオペラオーはその舞台で不利なはずの追い込み(事実、後の三冠馬デーブインパクトも追い込み馬だった為に中山を苦手としていた)で差し切って勝利している。

そんな馬に馬鹿正直に瞬発力勝負を仕掛けても勝てる訳がない。

ではどうするか? 答えは単純に馬鹿正直に勝負しなければいい。デジタルの調教師である白井氏が騎手に向けた言葉は「君は客の方に向かって走ればいい」というものだった。

【直線に入ってサイレンススズカが未だ先頭だ!】

湧き上がる大歓声を浴び、サイレンススズカは一息つく。すると全頭がサイレンススズカを襲うかの如く流れ込んできた。

【メイショウトドウ、ステイゴールドが二番手にやってきた。しかし後ろから物凄い勢

いで世紀末霸王が来たーっ!!」

観客は栗毛の世紀末霸王を見て大歓声を浴びさせた。

「だかしかし! サイレンススズカも粘る粘る! 3馬身のリードを守れるか!」

しかしオペラオーはサイレンススズカに何故か届かない。あと少しというところで伸びが足らない。普段であればオペラオーはサイレンススズカを差し切っていた。しかしこの時ばかりは違かった。何故ならいつもの天皇賞秋は良馬場であり瞬発力を発揮するが、今回のこのレースは重馬場だ。それ故に瞬発力は落ちてしまう。それを言ったらサイレンススズカも同じだがサイレンススズカは一息どころか二息も付いていないのだ。

少し話は変わるが横澤典義という騎手がいる。その人物は追い込みは苦手(下手したら中堅ジョッキークラス)であったものの逃げ・先行に関しては世界でも敵うものはそのうはない。その横澤に田根豊が教わったのは何も直線でヨーイドンの競馬が全てではない。ということだ。

特にそれを実感させられたのは98年の菊花賞。2番人気のセイウンスカイに騎乗した横澤は最初1000mの通過タイム1分を切りそうな勢いで超ハイペースで大逃げし、その後悠々と逃げて2000mの通過タイムが2分3秒という超スローペースに引き下げた。それに気づかない田根豊達ジョッキーはハイペースであることを警戒し

てセイウンスカイにまんまと逃げ切られた。つまりレースを支配してしまえば実力が多少劣っていても勝てるのだ。

それを教わった田根豊は今回のレースに活かし、サイレンスズカに一息も二息もつかせることが出来た。

しかしそんな田根豊に絶望の馬がやってきた。

「大外からアグネスデジタルもやってきたーっ!!」

外国産馬アグネスデジタルだ。デジタルは敢えて大外に回ることによって荒れている馬場を避けていた。その結果瞬発力も冴え、テイエムオペラオーすらも抜き去ってしまった。

「行けーっ!! スズカ! 後少しだ!!」

それは田根豊が発したのか、あるいはサイレンスズカの調教師である橋元氏なのか、または観客の誰かなのか……誰かわからない。しかしその言葉がサイレンスズカ達に力をくれた。

「サイレンスズカ逃げ切った! 二着にはアグネスデジタル、三着にテイエムオペラオー、四着争いは微妙です……」

結果はサイレンスズカの逃げ切り。3年ぶりに出走した天皇賞秋の舞台で見事優勝した。



サイレンススズカが逃げ切ったことによってインターネットではアグネスデジタルは天皇賞秋に出走させたことに対する賛否両論の議論が交わされることになり、テイエムオペラオーは衰えが来ていたと囁かれるようになった。

その後サイレンススズカは香港国際レースに招待されるが屈腱炎により辞退して種牡馬入りするとすぐさま結果を出して2009年にはリーディングサイアーとなり、ディープリンパクトやキングカメハメハ等とリーディング争いを繰り広げることになる。

## 外伝 マーチオブスズカ

2005年5月1日。

キョウエイマーチとサイレンススズカとの間に一頭の牡馬が生まれた。この時サイレンススズカ産駒はまだ走っておらず、評価額も種牡馬としての同期のアグネスタキオンの産駒達の方が上である。

しかし伝説の逃げ馬二頭の配合は話題を呼んだ。しかもその当歳馬は父サイレンススズカと同じ日に生まれたから尚更だった。

アグネスタキオン以来4年振りに無敗で皐月賞を制したデーブインパクトも父サンデーサイレンス

SとSと同じ誕生日に生まれたこともあり、話題は話題を呼び牧場に騎手、調教師を始めた数多くの競馬関係者が訪れた。

「(いつかこの馬で皐月賞やダービーを取ってみたい……)」

その中でも惚れ惚れと見ていたのはサイレンススズカの主戦騎手だった田根豊だ。今はサイレンススズカが競走馬から引退し、そうなっているだけであり田根豊はいつまでもサイレンススズカが相棒と言えるだろう。

しかし田根豊にはサイレンススズカの代わりとも言える相棒が現役にいる。その相

棒は今世間を騒がせている無敗の皐月賞馬、デイーピンパクト。彼こそが今の相棒だ。だが彼はあまりにも強すぎる。種牡馬価値を少しでも下げない為にも4歳の有馬記念で引退してしまふ未来が予想される。その予想を裏切るにはデイーピンパクトがクロフネのように屈腱炎などの故障を理由に早く引退するしかない。少なくとも5歳以上現役を続けることはなくデイーピンパクトに乗った田根豊がこの馬と戦うこともない。

「ああ……早く乗りたい」

そんな田根豊の呟きは2年後に実現することになった。

く2年後く

無敗の三冠馬デイーピンパクトが有馬記念で有終の美を飾り、引退。代わりに世間が注目したのはデイーピンパクトに敗れた古馬勢ではなくクラシック有力候補のフサイチホウオーという馬であった。この馬は皐月賞こそ3着であったが重賞を無敗のまま3連勝というとてもないことをやってのけただけでなく、負けた皐月賞でも超がつくほどのスローペースであるにもかかわらず逃げ馬二頭を捉えたとまで思わせるほどの末脚を爆発させたのだ。しかも父ジャングルポケットが苦手とした中山競馬場でその結果だ。府中の舞台なら勝ったも同然。そんな理由で日本ダービーでフサイチホウオーは単勝オッズ1倍台に食い込んだ。

単勝オッズ1倍台と言えばトウシヨウボーイ（2着）以来単勝オッズ1倍台の全ての馬が顕彰馬になっているだけではなく、敗北もしていない。またロングシンホニー（5着）以来1番人気は必ず馬券に絡んでくるのだ。その中でも連対を外したのはメジロブライト（3着）のみであり、掲示板に載っていることから如何に1番人気が信頼されるかわかるだろう。

つまり、日本ダービーが始まる直前まではフサイチホウオーは顕彰馬になるだけでなく、ダービーの勝ちも確定とまで言われていたのだ。

だがその時の勝者はフサイチホウオーではなかった。その年、クリフジ以来64年振りに牝馬がダービーを制した。その馬の名前はウオッカ。前走桜花賞こそダイワスカレットに敗北したが彼女は日本ダービー史上最速の末脚を見せ、見事日本ダービーを制した。

なお、フサイチホウオーは7着と惨敗し以降勝てなくなってしまうた。その結果鬱病を患い、引退した。かつて顕彰馬になるだろうと言われていた馬がこのような結果を迎えるとは誰にも予測出来なかった。

### 閑話休題

キョウエイマーチ産駒のマーチオブスズカは鞍上田根豊の希望もあつて8月にデビューした。この年の2歳馬もやはりと言うべきかアグネスタキオン産駒の馬がダイ

ワスカーレット同様に活躍し、アグネスタキオンが如何に種牡馬として優秀かを見せつけている。マーチオブスズカの出走するレースもアグネスタキオン産駒がおり、マーチオブスズカといえども決して油断出来る敵ではない。

田根豊はそんな事を考え、マーチオブスズカに騎乗しようとするが……何故か馬自身に拒否られた。

「えっ!？」

田根豊はまさか拒否られるとは思わず、戸惑ってしまふ。気性が荒いことで有名なインナリワンですら手足の如く操れる田根豊が馬の事で戸惑ってしまふことは相当なことだ。田根豊が気性のことで戸惑ってしまう馬と言えばステイゴールドやエアシャカールくらいのものであり、どちらもサンデーサイレンスの血を引いている。そして田根豊は父サイレンススズカというよりもこの馬は祖父サンデーサイレンスなんだということを知り、頼もしさを感じた。するとマーチオブスズカは田根豊の表情を見て笑みを浮かべ、背中を預ける。

「やっぱり、お前はそういう馬なのか」

そして田根豊はこの馬が「余計なことを考えずに黙ってやれ」ということを伝えたかったのだということを確認する。

「マーチオブスズカ、これは凄い！　さらに突き放してゴールイン！」

終わってみれば父サイレンススズカというよりも祖父サンデーサイレンスを彷彿させるような走りで圧勝。脚質や毛色こそサイレンススズカそのものであったがTV越しから見ても荒々しさをこれでもかと言わんばかりに醸し出しながら走っていた為にサンデーサイレンスが栗毛になって走っているようにしか見えなかった。祖父サンデーサイレンスの勝負根性に父サイレンススズカのスピードを好事に受け継いだマーチオブスズカはその後、3戦（うち2戦は重賞）を勝ち朝日杯FSに登録。父サイレンススズカ、母キョウエイマーチ、母父ダンシングブレーヴという血統や圧倒的なパフォーマンスもあつてか1番人気に支持された。

「朝日杯FSスタート！ さあ、やはりこの馬が行った行った行った！ マーチオブスズカがやはり先頭に立つてペースを作ります！ 続いてゴスホークケンが三番手を引き離す形で二番手についています！」

マーチオブスズカとゴスホークケンが好スタートを決めた朝日杯FS。この朝日杯FSというレースは今となっては価値が薄くなったが、かつてはダービー馬を多く輩出したレースでもある。トキノミノル、メリーナイス、サクラチヨノオー、アイネスフウジン、ミホノブルボン、ナリタブライアン……いずれもダービーを後に勝利していることから如何にレベルが高いレースかわかるだろう。ダービーを勝っていないともこの勝者で後にGI級のレースを勝った馬は多くいる。この朝日杯FSもいずれ、伝説と

なるだろう……そうファンの声が聞こえ、マーチオブスズカは走る。

「お、おい!？」

田根豊の指示すらも無視し、マーチオブスズカは二番手のゴスホークケンに10馬身以上も差をつけ、大逃げをする。

「おっと、マーチオブスズカ折り合いがついていないのでしょうか？ 1000mの通過タイムが56秒8、いくらなんでも速すぎるぞ!」

父サイレンススズカですら最初の秋の天皇賞を挑んだ時の1000mの通過タイムが58秒台であり、アナウンサーが「速すぎないか川内騎手!？」と実況したくらいである。それを2歳馬が実行するのだから恐ろしいことである。

【さあ直線に入ってマーチオブスズカが先頭だ! まだリードは9馬身以上もある!】

このリードを守りきれれるのでしょうか! 田根豊とマーチオブスズカ!】

「……信じているぞ! マーチ!」

田根豊がムチを振るい、マーチオブスズカに気合が入る。

「(こ、これは!?)」

その瞬間、田根豊は自分が置いていかれる感覚を感じ、必死にしがみつくと。後ろなど見ていられる余裕もなくそのままゴールインする。そしてマーチオブスズカがしばらく走って大人しくなると田根豊は掲示板でとんでもないものを目にしてしまった。

「……はあっ!？」

それは目が飛び出してしまうほどの衝撃であった。駆け抜けたタイムが1.31.9とレースレコードを1秒以上も縮めてのゴールだったからだ。2着との差は大差であり、如何にこの馬が化け物じみているか改めて認識してしまった。

【時計はレコード、時計はレコード! なんと1秒以上も縮めてしまったマーチオブスズカ。来年のクラシックの舞台はこの馬で決まりです!】

競馬関係者は当然のこと中山競馬場にいた人間もその事態に騒然としてしまう。タイムもそうだが大差を付けての勝利はマルゼンスキー以来のことであり、やはりサイレンスズカの仔はサイレンスズカであったと認識させられるのであった。

このレースのおかげでサイレンスズカの種付け料は向上し、1000万を超えたがそれにもかかわらず種付けの申し込みが殺到した。この背景にはアグネスタキオンの死亡が大きく関与している。アグネスタキオンの急死により代用種牡馬の筆頭であったのがサイレンスズカであったのだ。サンデーサイレンスの後継者筆頭のディーパインパクトの種付け料が1000万円とサイレンスズカと同額であるのとまだ産駒たちがデビューしていないため種牡馬としての実績が未知数である。それよりか実績のあるサイレンスズカに種付けした方がいいという考えと、ディーパインパクトはシンジケートを組んでおり種付け出来る馬は限られていたということもあってサイレン



スズカに種付けの申し込みが殺到したという訳である。

### 閑話休題

兎にも角にも朝日杯FSを無敗で勝ったマーチオブスズカ。その余りの強さから、かつてグラスワンダーがあだ名されていたようにマルゼンスキーの再来と呼ばれるようになった。

### 翌年

朝日杯FSを日本レコードで勝ったマーチオブスズカ。そんな彼が目指す先にあるのは日本ダービー。その前哨戦には皐月賞、青葉賞、京都新聞杯の三レースが用意されている。その中で唯一G1レースであるのが皐月賞。マーチオブスズカ陣営は当然の如く皐月賞を選択。皐月賞のトライアルレース弥生賞に出走登録した。

故にマーチオブスズカのローテーションは以下のようになる。

弥生賞↓皐月賞↓東京優駿（日本ダービー）

「さていこうか」

マーチオブスズカの主戦ジョッキー田根豊がマーチオブスズカに気楽に騎乗しようとする、やはり拒絶された。もつとも拒絶と言っても暴れたりはずせ距離を離された

だけで田根本人に怪我はない。

「お前、そこまでやるか？」

田根はマーチオブスズカが神経質過ぎることや賢過ぎることに呆れ、気合いを入れる。マーチオブスズカは闘魂の塊とも言うべき存在であり、騎手が少しでもやる気を見せないものなら乗らせない。超がつくほどストイックなのだ。まさしく競馬をするために生まれてきたような競走馬である。

「……しっ！ 行くぞっ！」

田根の気合いの入った声がマーチオブスズカに伝わり、マーチオブスズカが雄叫びを上げる。イレ込んでいるようでそうでない馬。それがマーチオブスズカだった。

【勝ったのはやはりマーチオブスズカーっ!! 強すぎる!】

終わってみれば圧巻の逃げ切り。日本レコードのおまけ付きだった。

「ふう……心臓に悪い馬だよこいつは」

弥生賞をレースレコードではなく日本レコードを塗り替えたのにも関わらず田根がそのような発言したのが気になった記者達が尋ねた。

「田根豊騎手あの内容でも不満なんですか？」

「馬そのものじゃない。僕自身です。朝日杯と今回の弥生賞どちらも落とされそうになりました」

「落とされそうになった?」

「いえ、実際には落とされそうになった訳ではなく、そうですね。マーチオブスズカの加速度に僕が置き去りにされるそんな感覚でした。ディーブ（インパクト）が飛行機ならマーチ（オブスズカ）は戦闘機ですかね」

「マーチオブスズカはディーブインパクトを超えるとということまで?」

「中距離ならばディーブインパクトやサイレンススズカ以上かもしれません。だからただしがみつくなかないんですよね」

「田根豊騎手ありがとうございます」

そして皐月賞当日。やはりというべきかマーチオブスズカに人気が集まり、全員がその動きに注目する。騎手達と調教師達、それに穴党の人々はこのいつだけには勝たせるな。という気迫が会場に伝わる。そしてゲート入りが全頭終わり

【ゲートが開いて三歳クラシック第一戦目、皐月賞スタート! やはりここで行ったマーチオブスズカが行ったーっ!】

マーチオブスズカが一時先頭に立つがすぐに暴走気味のペースで飛ばす馬が数頭。マーチオブスズカを潰しに来た馬達だ。

「(さて、田根豊がわざわざ弱点を言ってくれたんだ。なら活用しないとな)」

その思いは誰もが一緒にマーチオブスズカをマークする。田根豊が言った弱点、それ

はマーチオブスズカが加速するとしがみつくしかなく、他のことは何も出来ないということだ。マーチオブスズカの前に馬体があるとそれを避けたくとも避けられず突撃してしまう。そうなればマーチオブスズカは失格。リーディング騎手たる田根豊も騎乗停止となる。リーディング争いを少しでもなくそうとする輩にとってはこれほどありがたい話はない。

「ここでも1000mを通過してペースは55.9。いくらなんでも皐月賞とは思えぬこのハイペースを突き進む二頭にマーチオブスズカ！ 後方勢にはかなり有利なペースですがどうなるのでしょうか？」

ハイペースになればなるほど有利になる馬は追込脚質の馬である。その理由は前の馬達が力を使い果たし、力を残している後方の馬がその馬達を差せるからだ。逆にスローペースは逃げ馬が力を残している為に追い込みをかけたようにした馬が差せない。もともと一般的な例であり、例外も存在する。マーチオブスズカの父サイレンススズカはその典型例でありハイペースで逃げ切る馬であったし、三冠馬ミスターシービーは追込脚質であったにも関わらずスローペースが得意であった。

「さあ、これでマーチオブスズカの化けの皮を剥いだけ」

そして1400m通過した時点でマーチオブスズカの前にいる二頭が力尽き、マーチオブスズカを巻き込む形で後退する。観客や騎手、調教師達はよくここまで持ったなど

思っていたがそれ以上に注目したのがマーチオブスズカがそれをあっさりと交わしたことだ。

「え？」

マーチオブスズカの前にいた騎手達<sup>が</sup>啞然とし、遠くへ行く田根を見つめる。

「（そうか、巻き込ませるタイミングが早すぎたのか）」

二人の失敗は馬が悪かった。この一言に尽きる。マーチオブスズカを相手にするならば父サイレンススズカがマイル戦で負けたようにマイル専門の馬を用意すべきだったのだ。そうすることで1600mで力を使い果たさせ、マーチオブスズカの妨害も出来た。

「マーチオブスズカ一着でゴールイン！ 勝ち時計は1分55秒8！ またもやレコードだ！」

結局このレースもマーチオブスズカは日本レコードで勝利。まさしくマーチオブスズカに敵無しを伝えるような皐月賞であった。

その後マーチオブスズカ陣営は日本ダービーへ目指して調教するも、鼻血で出走を取消。代わりに宝塚記念を日本レコードで優勝し凱旋門賞のプランを立てるが屈腱炎が発覚し白紙となり引退。初年度のサイレンススズカ産駒ながらにして最高傑作とまで言われる評価を受け種牡馬入りした。

## 外伝 サイレンスプリンス

西暦2014年

マーチオブスズカがターフを去ってから数年後。サイレンススズカ産駒は、重賞馬はいくらかいるもののGIが勝てず善戦している馬が多く、パツとしない印象だった。

サイレンススズカ産駒の特徴は身体が柔らかく、スピードも出やすい。言うなれば父の特徴を引き継ぎやすい傾向があった。しかしその傾向に釣られたのか、気性が荒く、騎手が少しでもやる気を見せないと馬がやる気をなくす。酷いときには乗せようともしない馬もいた。マーチオブスズカがその典型的な例だった。

だがマーチオブスズカよりもその傾向が強かったのがカワカミプリンセスを母に持つサイレンスプリンス。カワカミプリンセスの血統を少し、具体的には二代前まで遡ると外国馬ばかりだが名馬——名馬には競走馬としてか種牡馬としてかの二つ種類があるがこの場合は前者——ばかりがそろう。父母は名牝グッバイヘイロー、父父は欧州80年代最強馬ダンシングブレーヴ、母父は唯一無二無敗で米国三冠馬となったシアトルスルー、母母父は史上最強の米国三冠馬セクレタリアトと豪華メンバーがズラリと揃う。いくらサラブレッドでもここまで揃うのは稀な例である。

しかもカワカミプリンセス自身も名馬そのものの成績を残している。特に三歳時点では優駿牝馬と秋華賞を無敗で制し、その後エリザベス女王杯で降着するものの先頭で走り、誰もが無敵感を感じていたくらいの名馬だった。

そんなカワカミプリンセスの息子として生まれたサイレンスプリンスが遂に三歳となった。

この年のクラシック候補はラジオNIKKEI杯を制したハーツクライ産駒ワンアードオンリー、共同通信杯を制したフジキセキ産駒イスラボニータ。そして弥生賞でワンアードオンリーを打ち負かしたサイレンススズカ産駒の無敗馬サイレンスプリンスだった。

「三強対決だつて？ ははっワロス。ここはサイレンスプリンスで確定だろ」

……三強対決といったら三強対決だ！

とにもかくにも、皐月賞。弥生賞馬は皐月賞で負けやすい。ここ数年そのような傾向が強い。十年前（西暦2004年）から遡り実際のデータを以下のように纏めた。尚（○）の中はその年の皐月賞馬である。

- ・コスモバルク（ダイワメジャー）
- ・ディープリンパクト（ディープリンパクト）
- ・アドマイヤムーン（メイショウサムソン）

- ・アドマイヤオーラ（ヴィクトリー）
- ・マーチオブスズカ（マーチオブスズカ）
- ・ロジュニヴァース（アンライバルド）
- ・ヴィクトワールピサ（ヴィクトワールピサ）
- ・サダムパテック（オルフェーヴル）
- ・コスモオゾラ（ゴールドシップ）
- ・カミノタサハラ（ロゴタイプ）

一目瞭然。弥生賞馬が皐月賞を勝った例はディープリンパクトやマーチオブスズカ、ヴィクトワールピサの三例のみである。さらに遡るとスペシャルウィークやナリタトップロード等の後にGIを勝った名馬すらも皐月賞を勝てずにいる。そこまで遡っても勝った例は2001年のアグネスタキオンが加わるだけで、さらに弥生賞馬が皐月賞馬となったのは1987年のサクラスターオーまで遡らなければならない。もう一つおまけに言っておくと二年後、無敗で弥生賞を勝ったマカヒキすらも皐月賞を勝てなかった。

何が言いたいかというとそのくらい弥生賞馬が皐月賞を勝つのは難しいことである。その弥生賞馬が皐月賞に挑戦する。それだけでサイレンスプリンスを見放す動きも



あるほどで、本来であれば単勝オッズ1倍台になってもおかしくないがそのジंकウスもあつて単勝オッズ2倍台に収まった。

しかし本当に強い馬はジंकウスなど関係ない。2000年時のテイエムオペラオーがその典型例だ。彼は長らく続いていた天皇賞秋やJCの一番人気不勝利のジंकウスを破り勝利した。しかも天皇賞春秋共に一番人気で勝利する例は彼が初めて——後にキタサンブラックが達成——である。

「サイレンスプリンスがまだ粘つて残り100m。二着争いにイスラボニータがやってくるが苦しい！ 誰もいない一人旅で今一着ゴールイン！ 難なくこなしましたサイレンスプリンス。ダービーも楽しみです」

サイレンスプリンス。この王子もその例に漏れず、勝利した。無敗で弥生賞を勝利した馬が皐月賞を制す。マーチオブスズカ以来のことであつた。

そして日本ダービーこと東京優駿を勝てば無敗の三冠待つた無し。何故ならばトキノミノル、コダマ、トウカイテイオー、ミホノブルボンが無敗で二冠を制したのにも関わらず三冠馬になれなかつた理由は弥生賞に出走していなかつたからでシンボリルドルフ、デーブインパクトの二頭はそのレースに出走し勝っている。

「ああつと！ サイレンスプリンス外ラチに向かつて走つていった！」

しかしサイレンスプリンスに問題が発生した。それは斜行だ。サイレンスプリンスの悪い癖は祖父サンデーサイレンスから受け継がれた気性の荒さ。何度も言うがサンデーサイレンスの気性の荒さは非常に荒いことで有名だ。レースの最中隣の馬を弾き飛ばしたりしている。種牡馬になつてもそれは変わらず隣にいた馬を威嚇したりしている。その為隣の馬房にはオルフェーヴルのもう一人の祖父ことメジロマックイーンが傍にいて解決したが、それでも生涯サンデーサイレンスの気性はほとんど変わらずにまじまじだつた。

さてここで話は変わるがサンデーサイレンスの気性の荒さは父ヘイローから受け継がれている。しかしヘイローは父つまりサンデーサイレンスの祖父にあたるヘイルトゥリーズンは非常に大人しい馬——これも一説——であり、子孫であるグラスワンダー、ナリタブライアン等も大人しかった。父系に同じヘイルトゥリーズンをもつのにこの違いは何かと言われたらヘイローしかない。

ヘイローの気性が荒くなつた原因は、性質の悪い厩務員だという説がある。ヘイローはその厩務員から虐待され、身を守る為に人間不信となつて気性が荒くなつたと考えられている。無論この説の他にもヘイルトゥリーズンの気性は荒く、ヘイローの気性も父から受け継がれている説や、気性の荒いノーザンダンサーが近親（ヘイローはノーザン

ダンサーの従兄弟にあたる）だという説などが上げられるが、人間の性格が環境で変わるように馬も環境で変わることに違いはない。

話を戻そう。マーチオブスズカやサイレンスプリンスは良血馬故に徹底的に勝つことを強要された。その為、絶対勝利主義者となってしまったのだ。良い意味でも悪い意味でもマーチオブスズカにも見られた隔世遺伝がサイレンスプリンスにも出てしまった。いやサイレンスプリンスはヘイローの血が濃く、マーチオブスズカよりも更に気性が荒くなってしまった。

不幸中の幸いというべきか二番手から三馬身以上離れての斜行である為に降着させられることは確実でないが、間違いなく不利になるし審議にもなる。

「サイレンスプリンスがまだ粘る粘る！ イスラボニータ、ワンアンドオンリーが突っ込んでくる！」

そしてワンアンドオンリーが一馬身差まで詰め寄ったその瞬間、サイレンスプリンスが再び突き放した。

「な、なんだと……！」

「この日本ダービーに貴様の出番はねえ！」

このようなやり取りが二頭の間であったかどうかは不明だがワンアンドオンリーの心は完全に折れ、二着に食い込むことが精一杯だった。一着は当然サイレンスプリンス

であつた。

その後、サイレンスプリンスは古馬最強格の一頭ジエンテイルドンナがいる天皇賞（秋）で勝利したが、マーチオブスズカが早期引退した理由と同じくサイレンスプリンスも故障していたのであつた。3戦以上走つて無敗馬二頭を産駒に持つ馬はサンデーサイレンスとサイレンススズカのみである。